今村カトリック教会

二つの塔をもつロマネスク様式で赤煉瓦造りの壮麗な堂宇は、長崎の鉄川与助氏の設計、施工により大正元年（１９１２年）建築工事が始まり、翌２年（１９１３年）12月９日に献堂式が行われました。その背景には、多数の信者の篤志と労働の奉仕、ドイツをはじめ諸外国のカトリック教会の援助など厚い信仰心がありました。

今村カトリック教会の起源は天文年間（１５５０年代）と推定されています。当時、キリシタン大名「大友宗麟」の豊後国にはキリスト教が非常な勢いでひろまっていました。天文21年（１５５２年）６月、一万田右馬助が豊後竹田から家臣を連れ高橋家に来たことが、大刀洗の地にキリスト教の種をもたらしたのでしょう。

その後、領主がキリスト教の理解者で保護者であり、安穏な信仰を続けることができました。しかし、島原の乱に懲りた徳川幕府は、厳しい禁教を厳命しました。表向きは仏教という形をとりながら、裏面では密かにキリスト教が信仰し続けられていました。

幕末、開国への歩みが始まり、宣教師も渡来しはじめ、慶応３年（１８６７年）今村キリシタンの存在が明るみに出ました。明治６年、信仰の自由が公布され、コール神父、ソウレ神父と次々に今村を訪問し、村人に洗礼が授けられました。

ほたるの里

5月下旬以降飛び始め6月10日～15日をはさみ約1ヶ月間、鑑賞できます。一匹のメスが生む卵の数は500～1,000個くらいで、2～3日かけて、川岸の水際の近くで日中ほとんど日の当たらない所に生えているコケに産卵します。孵化した幼虫は、流れのある水中で9ヶ月間生活をします。巻貝の一種であるカワニナを食べます。大きくなった幼虫は、翌年の3月下旬から4月上旬に陸に上がり、土の中に潜り、マユを作りさなぎになります。時期がくると羽化し、地上に現れ飛び立ちます。成虫はほとんど何も食べません。草の葉に溜まった夜露などを飲むだけです。寿命は約2週間といわれていますが、外敵も多く、オスで3～4日、メスで5～6日くらいのようです。

変態を行うごとに生活場所を変えるゲンジボタルは、ホタルの種類の中で異例であるばかりでなく、完全変態する昆虫の中でもとてもまれな例です。これは、生き延びるために環境に適応した結果なのですが、一つでも汚染されれば（水質汚染や護岸工事など）全滅するといった結果になるのではないでしょうか。